

戦略的大学連携支援事業

「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」

口腔医学シンポジウム

「口腔医学」-歯科医療の将来像-

日時：平成 21 年 1 月 22 日（木）14：00～

会場：福岡県歯科医師会館 5 F 視聴覚室

プログラム

14：00	開会・挨拶	福岡歯科学園 理事長	田中 健藏
14：05	基調講演「なぜ？今、口腔医学か」	福岡歯科大学 学長	本田 武司
14：25	「医歯二元論の歴史と展望」	鶴見大学歯学部 特命教授	瀬戸 暁一
14：45	「口腔医学の果たすべき役割と進むべき方向」	北海道大学歯学部口腔病態学講座 教授	戸塚 靖則
15：05	「医学・歯学教育の将来」	国立国際医療センター名誉総長	鴨下 重彦
15：25	「医学と歯学によるチーム医療」	福岡大学医学部耳鼻咽喉科学講座 教授	中川 尚志
15：45	討 論	モデレータ 福岡歯科学園 理事長	田中 健藏
17：00	閉 会		
17：30	懇親会		
	(福岡県歯科医師会館 1 階 第 1・第 2 会議室)		

なぜ？今、口腔医学か

本田 武司

福岡歯科大学長

我が国で一時、同じ資格として行われていた医師と歯科医師の開業試験が、別個に行われるようになって約100年が経過した。その間、医学、歯科医学としてそれぞれの学問体系を確立しながら医療、歯科医療が進歩発展を遂げ、現在、世界に伍して高度な医療、歯科医療が提供されている。業としても歯科と医科は法律的に極めて厳格に分けられ、歯科医業の対象は、ほぼ歯に局限した形となり、同じ人体の一部でありながら口腔は他の部位と全く別扱いの感がある。解剖学的な口腔は空間かもしれないが、口腔に含まれる舌をはじめ口腔粘膜や、歯、顎骨、唾液腺、顎関節などは摂食・嚥下、呼吸、消化、発音など、人体にとって極めて重要な機能を持ち、全身疾患との関わりも深い。しかし、口腔が人体の中から切り離された形で医学部と歯学部で別個の教育、医療体制が取られているため、医療と歯科医療実践の過程で、しばしば領域間の問題や、これに起因する諸種の問題も起こっている。

口腔に関しては、主に歯学部で教育が行われているが、歯学教育の大半は歯に集中し、医学部でも口腔に関する教育はあまり行われていない。しかし、超高齢社会を迎えて有病高齢者が増加した現在、摂食障害や口腔常在菌による誤嚥性肺炎などの高齢者特有の病気が多発している。そのため、口腔ケアをはじめとした医療の在り方、歯に重きを置きすぎた歯学教育の在り方、そして口腔をあまり視野に入れていなかった医学教育の在り方を再考する必要があると思われる。

従って、これらの問題解決の糸口として、また、患者さんのための医療を実践するためにも、現在のように歯に重点を置きすぎた歯学教育、歯科医療から歯と周囲組織や顎関節などを広く含めた口腔領域全体を視野に置いた教育や診療（口腔医学）に変革し、医学教育の中にも口腔医学を取り入れた教育を行う必要がある。

医歯二元論の歴史と展望

瀬戸 暁一

鶴見大学歯学部特命教授（学長補佐）

明治7年医制76が制定されたときは医歯一元論であった。それが32年後医歯二元論として医師法、歯科医師法が制定されるまでにどのような変化があったのか。また国際的にも国内的にも二元論に至る必然性、社会的な背景に関しては詳しい文献に乏しい。欧米においては外科学の発展が目覚しく、外科学の延長上に歯科学が発展していったが、わが国は口中医の伝統が古来からあり欧米型とは別の発展様式を辿っていた。江戸時代の入れ歯、入れ眼、入れ鼻師などが出現して高度な補綴が行われていたという記録もある。

蘭学の到来と共に西洋医学が輸入されるようになると日本の医学そのものが大変革を強いられ、やがて明治時代の西洋指向型に連なっていく。その過程の中で、英米人から直接指導を受けた歯科医集団が現れ、その代表格が明治9年歯科医師免許第一号となった小幡英之助で、この頃から日本は西洋式の医歯二元論が定着し、明治39年医師法、歯科医師法の同年成立を見ることになる。

日清、日露戦争を経て日本の国威は急速に発揚して俄かに世界史に登場するようになったが、この頃20世紀初頭の外科医学水準はまだまだで、麻酔、感染対策の充実に支えられて驚異的な発展を遂げるのは少し時代が下がる。しかしこの近代医学の黎明期にあって、確実に除痛をはかり、咀嚼機能回復が行える歯科医師は爆発的な需要の増加と共に大きく飛翔しえたのである。その後歯科医師の需要が急速に伸びるにつれて、歯科医師の医行為などについて頻りに議論されていたがやがて敗戦になり、米国の主導で一気に歯科大学が誕生したのである。

欧州においては大きな戦争が繰り返され、口腔外科学が軍陣医学の中で脚光を浴び急速に進歩していった。口腔外科学は医歯二元制のなかで本来的に両者の狭間に存在する一方、両者の共有部分でもある。そのためにドイツ語圏を中心としてダブルライセンスの考え方がクリミア戦争の頃から生まれた。その方向は米国をはじめとして20世紀末には全世界を席卷するかに見えた。ドイツ医学を奉じていた日本には医歯両免許取得の機運は生じたが大きく実るということはなく現在歯科医師の口腔外科医は95%を上回っている。そこで日本が先頭に立って米国に影響し、全世界を巻き込んでのライセンス論争が繰り広げられ、01年に国際口腔顎顔面外科学会総会にてダブルライセンスは必ずしも必要ないことが確認された。

戦後歯科大学が誕生して歯学部は医学部とならんで6年制をとり、医歯二元の理念が制度の中で明瞭に確立され、それは世界のモデルともなる整然としたものであった。多くの歯科医学の学会もこの頃に誕生した。しかし不思議なことに新医療技術を研究開発する使命、あるいはそれを他の科学領域に発信する使命を果たすこともなく、この間における外科医療の驚異的な発達に比べていかにも貧弱化しているのが実情である。そればかりか法的には徹底した二元論が敷衍して歯科医療は医科の医療から次第に乖離する傾向にあり、そのために様々な医療上の齟齬が生じ国民の信頼を失いつつあるのが現状ではなかろうか。いま歯科医学、歯科医療は根本的に考え直す必要に迫られている。そこで医歯一元論をも視野に入れて原点に帰った意識構造改革を行うことが現状打開の切り口になるであろう。

しかし現状では歯科医師法の改定はそう簡単には行われえないことは自明であり、医歯二元論が世界の中で定着している中で日本のみが逆噴射するわけにはいかない。さらに極端な負の連鎖の渦中にある歯科が一元論を唱えても医科が簡単に承諾することはないであろう。

そこで今為すべき最も肝要なことは歯学教育において自動車学校的なスキル教育を改めて教養教育の基盤の上で医学教育を本格的に導入し、その上でデンタルスキルを教育するスタイルに変更するのはどうであろうか。それによって医療の中での歯科医療の位置づけが明らかとなり、自費診療マインドが払拭され、また若い頭脳が再び歯科に集まってくるであろうと確信しているがいかかであろうか。

口腔医学の果たすべき役割と進むべき方向

戸塚 靖則

北海道大学大学院歯学研究科口腔病態学講座口腔顎顔面外科学教授

口腔は、食物の摂取や咀嚼、嚥下、会話など様々な機能を営んでいる。それを可能ならしめるため、口腔及びその周囲は、歯や歯槽骨、歯肉、粘膜、顎骨、咀嚼筋、唾液腺など、多くの組織や器官から構成されており、形態も複雑である。ただし、代謝面からみると比較的単純で、代謝が活発な骨や筋肉、唾液腺、粘膜などの組織と、代謝がほとんど行なわれない歯に分類される。前者においては、自然治癒が期待できることから、疾病の治療は、投薬や生活習慣の改善などによる病因の排除、ならびに安静や栄養補給などによる体力の回復が主体となる。必要に応じて病変の除去などの外科的処置も行われるが、創傷治癒が正常に営まれることを前提としている。一方、後者では、自然治癒が期待できないことから、歯、特にエナメル質や象牙質に生じた病変は全て人の手で除去し、欠損部は人工物を用いて人為的に修復しなければならない。しかも、歯は極めて硬く、エッタービン等が導入されるまでは、歯の硬組織病変の除去は時間と手間のかかる困難な手技であった。また、口腔は物理的・化学的・生物学的にみて厳しい環境にあるため、歯の修復材料には安全性や機械的強度に加えて、耐酸性や操作性、審美性など様々な性質が要求される。また二次う蝕の予防に加えて、歯根膜に存在する知覚神経は極めて鋭敏であることから、歯科用修復物の製作には数 10 ミクロン単位の正確さが要求される。このため、エッタービン等が用いられるようになった後も、歯の欠損の修復には多くの知識と高度な技術が不可欠で、その修得には相当の年月が必要であった。研究面でも、新たな機器や優れた材料の開発が必要であった。これらのことが、歯学は医学の一分野でありながら、今日まで、医学とは異なった教育研究体制がとられ、異なった道を歩んできた大きな理由である。しかし、科学技術の進歩により、歯の切削等に用いる機器は飛躍的に進歩し、また修復物の作製に関しても新しい材料の出現や製作機器の開発などにより、基本的な手技の修得は以前に比べて容易になっており、最近では CAD/CAM による修復物の製作も行われている。

一方、少子高齢化や口腔の健康志向の高まりなどから、歯科で扱う疾病は大きく変化している。以前は、う蝕と歯周炎がほとんどであったが、最近では、口腔乾燥症や粘膜疾患、舌痛症、嚥下障害、味覚障害、顎関節症など、多様化している。近年、歯周疾患と糖尿病との関連が注目されているが、その他にも全身状態や全身疾患と関わりのあるものが少なくない。さらに、以前は一般の歯科で扱う部位は歯と歯周組織に留まっていたが、最近では歯科用インプラントが標準的な治療になりつつあり、顎骨にまで拡大している。また、患者の高齢化が進み、慢性疾患や合併症を抱えた患者の割合が増加している。歯科治療においては、局所麻酔を使用する頻度が高く、しかも歯周組織の解剖学的な特徴から、アドレナリンを含有したものや高濃度の麻酔剤を用いることが多く、循環動態に影響を及ぼしやすい。また、歯髄炎や歯周炎など歯性感染症の割合が高く、抗菌薬や鎮痛薬を投与することも少なくない。このように、最近では、歯科で扱う疾患や治療法をみても、あるいは患者の年齢・全身状態からみても、歯科医師にとって、全身の理解と医科で扱う疾患についての知識が不可欠のものとなってきている。

このような状況において、口腔の健康維持や口腔疾患に対する人々の要望に応じて最良の対応ができる歯科医師を養成するには、2つの方法がある。1つは、歯学教育カリキュラムを大幅に見直し、これまで歯の切削や修復物の製作に関する知識と手技の修得に費やしてきた時間を、一般医学の修得に当てることである。もう1つは、医学と歯学の教育を一元化することである。この場合は、歯学に特有の教育が加わることから、医学教育に必要な時間数は増加するが、基本的な事項に絞ればそれほど膨大なものになるとは思われず、また咀嚼や生体材料、口腔ケア等についての教育は医師にとっても有益であろう。歯科に特有の歯の切削や修復物の製作に関する知識と手技の修得は、内科や外科、耳鼻咽喉科等と同様に、卒後研修と後期研修で行われることになる。そのため、現行に比べると一人前の（歯科）医師になるまでに時間がかかるが、全身に関する豊富な知識を持った口腔医学の専門医が養成される。

現在別々に行なわれている医学教育と歯学教育が統合されると、共通分野の統廃合が進み、教員の有効活用が可能となり、教員不足の解消にも繋がる。研究面をみても、現在は遺伝子・分子生物学の時代であり、医学と歯学ばかりでなく、薬学、農学、理学との壁もなくなっている。材料等の分野でも、歯の再生が可能となりつつある時代に、歯科に限定している必要はなく、人体全体を対象とすべきであろう。このように、医学・歯学教育の一元化は時代の変化に即したものであり、多くの利点を有することから、その実現に向けて早急に討議を開始すべきであると考ええる。

医学・歯学教育の将来

鴨下 重彦

国立国際医療センター 名誉総長

現在医師不足が大きな社会問題となっている。しかし、つい 10 数年前には関係者の間で医師過剰に対する警戒感が強く、旧厚生省は文部省を通じ医科大学に対し学生の定員削減を要請していた程であった。それがここ数年は急速に医師不足の状態となり、医療の現場では医療崩壊が叫ばれている。その対策として医学部学生定員を 1.5 倍に増やす、というような議論さえ出た。医師不足には臨床研修必修化が追い打ちをかけたとされているが、その見直し程度で解決する問題であろうか。また医師不足に対し、医学部の学生定員を増やすというのは、あまりにも短絡的ではないであろうか。すでに日本は人口減少社会となっている。今後は毎年 50 万都市あるいは 100 万都市が消えていく勘定という。今年医学部を卒業して医師になるものは 50 年後も現役であろう。2050 年には、4 割増えた医師が 2 割減った人口を診ることになる。医療費が変わらなければ医師の収入は半減する。一方で歯科医師はすでに過剰といわれている。

この際、中長期的に将来の医療のあり方を見据えて、医学、歯学、薬学、看護学、他のコメディカルも含む医科学 (Medical Sciences) 教育のグランドデザインを考え、抜本的改革を行わなければならないのではなかろうか。

以下のような問題点について私見を述べたい。

1. 医師、歯科医師の教育は大学院レベルのものにする。
獣医学、薬学が 6 年制の現在、医学・歯学の教育は 8 年制を検討する。学士編入学制度ではなく、全大学がアメリカ型のメデカルスクールを目指すべきではないか。
2. リベラルアーツ教育を重視する。
医学進学課程の廃止により、一般教養教育が希薄になっている。法、文、経、の文科系学部や、理、工、農など理系各学部を卒業したもので、さらに医師として人道に奉仕したいとの高い志を持つ学生を医師として教育すべきではないか。
3. 看護教育の充実を図り、専門看護師を養成し、広く活用する。
4 年制看護大学数は現在 169 校、医科大学の倍以上である。看護婦が看護師になって何が変わったのか？ 看護師、保健師、助産師はもっと高度の技術を身につけて医師と協力して医療現場で活躍すべきではないか。
4. 医学と歯科学との統合を考える。
戦後の教育大革で 6・3・3・4 制がスタートしたとき、医学と歯学だけは 6 年制となり、教養教育 2 年、専門教育 4 年となり、その間で入学試験が行われていた。歯科学はその専門性を生かしつつ、頭頸部の外科の一分野として発展すべきではないか。

医学と歯学によるチーム医療

中川 尚志

福岡大学医学部耳鼻咽喉科学講座教授

医科である耳鼻咽喉科および形成外科は歯科口腔外科と診療領域を重なるため、長年にわたって領域問題が存在してきたことは衆知の事実である。これに対し、平成8年厚生省（現厚生労働省）でひらかれた歯科口腔外科に関する検討会で議論され、意見がとりまとめられた。ひとつは歯科口腔外科の診療対象を具体化することと②歯科口腔外科の診療領域における歯科と医科の協力関係の確立である。しかし、具体的問題への対応はその後の重要な課題とされた。このため、医療機関ごとに意見の「まとめ」に沿って、問題解決に前向きの姿勢で臨み、口腔咽頭領域で良質な医療を提供し得るよう努力を続けるようにと記された。領域問題は本シンポジウムの本題とするべきことではないし、私自身の考えは医師側意見の代弁とはなりえない。このため、今回は②の協力関係に話しの重きをおき、医学と歯学がチーム医療を行なうことによっていかに口腔医学領域でよりよい医療を目指すことができるかについて私見を述べる。

口腔医学シンポジウム アンケート集計結果

1. あなたの年齢を教えてください。	35	アンケート配付数	48
a 20代		回収枚数	35
b 30代	3	回答率	72.9%
c 40代	11		
d 50代	16		
e 60代以上	5		

2. あなたの専門分野を教えてください	35
a 歯科医師(臨床系)	17
b 歯科医師(基礎系)	4
c 歯科医師(その他)	1
d 医師	4
e その他	9

aと答えた方にお尋ねします。
専門の診療科を教えてください。

a 口腔外科系	5
b 保存系	3
c 補綴系	1
d その他	8

3. あなたの職階について教えてください	35
a 教授	18
b 准教授	10
c 講師	3
d その他	4

4. 講演より前に口腔医学について話を聞いたことはありますか。また理解していましたか。		
a 聞いたことがあり、理解していた。	31	35
b 聞いたことはあるが、あまり理解していない	4	
c まったく聞いたことがなかった。		

5. 講演者の人選は適切でしたか。	35
a 適切と思う	23
b 普通	11
c 適切とは思わない	1

cと答えた方は理由をお聞かせ下さい。

回答b 口腔外科系にやや偏りがあると感じる

回答c 口腔外科出身の講師が多く、偏りが感じられた。補綴系、保存系の講師の話聞いてみたかった。
また医歯学に専門でない方(人文系など)の意見も聞いてみたい。

回答a 今回の講演者は口腔医学、医歯一元、二元論について日頃から認識の高い人の講演であり、
人選は適切であったと思うが、歯科領域からの演者がいずれも口腔外科出身者であったので、
今後それ以外の科(領域)の先生の意見も聴きたい。

6. 歯学教育における医学教育の時間をこれまで以上に増やすという考えに対し、あなたの意見をお尋ねします。		
a 大いに賛成である	13	35
b どちらかという賛成である	15	
c どちらでもない	7	
d どちらかという反対である		
e 全く反対である		

dまたはeと回答された方は理由をお聞かせ下さい。

回答b 歯学教育に資する医学教育(項目も含め)十分に考えて選択するのが良いと考える。

7. 医学教育において、口腔医学を取り入れた教育を行うことに関して、あなたの意見をお尋ねします。

- | | | |
|----------------|----|----|
| a 大いに賛成である | 17 | 35 |
| b どちらかという賛成である | 15 | |
| c どちらでもない | 3 | |
| d どちらかという反対である | | |
| e 全く反対である | | |

dまたはeと回答された方は理由をお聞かせ下さい。

回答a 医学と口腔(歯学)を関連づける教育が不可欠と考える。

8. これからの歯科医療にとって口腔医学の確立が必要だと思いますか？

- | | | |
|--------------|----|----|
| a 大いに思う | 20 | 35 |
| b どちらかというと思う | 13 | |
| c どちらでもない | 2 | |
| d あまり思わない | | |
| e 全く思わない | | |

dまたはeと回答された方は理由をお聞かせ下さい。

回答b カリキュラムの編成によって良し悪しが出てくると思う。

9. 次回のシンポジウムについてお尋ねします。

1) 討論してもらいたいテーマがありましたらお聞かせください。

- ・一元論・二元論には言及せずに、医学的基盤の必要性を様々な診療科の方に紹介してもらおうとよいと思う。
- ・医学教育における新しい教育方法(もしくは教育領域)の試みについて
- ・具体的な科目(内容)や編成(時間割)等についてのコンセプト
- ・口腔医学と国試成績は直ちに両立するか(ポジティブに考えてください)
- ・臨床模型実習の見直し
- ・歯科医療(治療)における患者の全身疾患状態をどのように把握するか、またそのための知識をいかに身につけるか。
- ・歯科医療の制度について厚労省の考え方が知りたい。
- ・医科と歯科の教育について諸外国での取り組みのちがいや歴史的背景について
- ・医学(医科)と歯学(歯科・口腔科)の区割りが必要か？(下記●の領域・立場の人の意見・討論)
- ・歯科が扱う疾患は実際に変化したのか。それとも疾患は同じで治療法が変化したのか。
- ・歯科医療の展望 行政的立場から
- ・歯科臨床の現場と医学(全身を扱う)教育の必要性
- ・口腔医学における学生の実際のカリキュラムがどのように変更していくのか？医学部との関係はどうなるのか？など
- ・学生の理解、学生が口腔医学の必要性についてどう考えているのか。
- ・口腔医学の立場からの実際の臨床の歯科医療のあり方。
- ・歯科の疾病の変化と将来の予測について
- ・保存や補綴の専門家の意見について
- ・心身医療に関する話題

2) また、講演者はどのような方がよいとお考えですか？

- ・あるテーマに関する問題の認識や方法論においては色々な考え方があると思いますので、今回のように意見やニュアンスの異なる人も含めてバランスのよい人員構成であれば良いと思います。
- ・大学又は開業医(歯科)の各診療科のドクター
- ・口腔外科系以外の分野の先生
- ・口腔医学責任者と国試責任者(ポジティブに考えてください) そのあとで父兄や学生
- ・医療関係者でない人
- ・臨床系教員
- ・補綴系の方、人文系(一般市民)の方
- ・救命救急医療従事者の方。
- 1. 歯科の領域から(補綴系、保存系、一般開業歯科医師) 2. 国民(患者)がどのように考えているのかの意見を述べる人、有識者(医療関係外の人) 3. 大学その他領域(理工学部、薬学部、文系学部他)の人が歯学部、医学部の区別をどのように思っているかの意見
- ・難しいかとは思いますが、口腔外科系の先生以外の方の講演もできれば拝聴したいと思います。

- ・ 厚労省や文科省の行政職の方、歯科医師会の方、口腔疾患の疫学調査を行われている方。
- ・ 口腔医学の考えに反対の立場をとられる方もいらっしゃると思います。その方のご意見も今後口腔医学の普及には必要かと思います。
- ・ 行政、歯科、医科をとりまぜ、広い観点から話をしてもらおうとよい。
- ・ 反対派の意見も聞きたい。
- ・ 医歯大 豊福教授など

10. その他、口腔医学に関してご意見がありましたらお聞かせください。

- ・ 医科領域の人材で、口腔医学に大いに反対であるという立場の方がいらっしゃるようならば、お話を拝聴してみたい。
- ・ 高齢化社会を迎えて口腔医学の重要性についての認識はどなたも異存はないだろうと思います。問題は云うまでもなく、様々な利害対立や制度上の問題がある中で、口腔医学の確立をどのように展開していくのかという方法論のプロセスだと思います。とにかくできることから一歩ずつ前進していくしかないと思っています。
- ・ 歯科と医科の一元化を期待します。患者さんたちも安心して歯科治療を任せられると思います。
- ・ 現在の歯科界の閉塞感を打破するため、また歯学部志願者を増やすためにも口腔医学のアピールは重要だと思う。
- ・ 歯科と医科の一元化を期待します。患者さんたちも安心して歯科治療を任せられると思います。
- ・ 教育内容にかかれることなので、国試を含めた全国的な変更(カリキュラムや教育目標)が必要だと思います。
- ・ 動機が高齢化という社会変化のみでは少々パワーに欠けるように思える。より明確な動機を鮮明に打ち出した方がよいのではないかと。
- ・ 現時点で学生である者たちだけではなく、将来的には社会人向けの再教育、つまり歯科医師の資格を持ち、すでに歯科医師として働いている人たちに対する口腔医学教育も近い将来必要になると思います。そのような教育に対する準備も始めなければならないのではないのでしょうか。
- ・ 国民のQOLの向上に口腔医学の確立は大変重要なことと考えられます。一方、卒前・卒後の口腔医学教育に関して、大学のみならず、地域、行政といった多方面からの情報の収集を行い、コンセンサスを深める必要があると考えます。
- ・ 歯科は歯のみという考えではなく、口腔内の一組織と考えなければならないということを今回の講演で再認識した。歯科医師もそのことを踏まえた上で、全身のことも考慮に入れながら診察・治療を進めなければならない。私も口腔医学の考えに基本的に賛成である。
- ・ 歯科医療従事者が全身疾患との関連を意識しながら歯科治療にあたることは、患者側から見た場合、大いに結構である。口腔医学という学問分野が確立することは良いことと思うが、従来の歯科治療、特に保存修復や咬合、顎補綴、矯正といった分野との関わりについてどのようになるのかが、自身の理解不足と思うがよく分からない。
- ・ 医学教育は5年あるいは6年の臨床実習の期間を利用することで口腔医学としてより効果の上がる内容もあると考える。
- ・ 歯科医療の現在の窮状をどう打開するかという観点から歯科医療のあり方、方向性を考えないと、口腔医学というコンセプトが空回りするのではないかと考えます。

戦略的大学連携事業平成20年度研修プログラム

第1日目 2月19日(木)	
時 間	内 容
13:00～13:30	受付
13:30～13:40	開会挨拶 福岡歯科大学 厚谷彰雄 事務局長
13:40～14:20	・「口腔医学の確立について」 講師:福岡歯科学園 田中健蔵 理事長
14:20～15:10	・「口腔医学の学問体系の確立と医学歯学教育体制の再考」 講師:福岡歯科大学 北村憲司 学長
15:10～15:25	休 憩
15:25～16:30	・基調講演「高等教育及び私学の現状と問題点」 講師:文部科学省高等教育局参事官付運営調査係 村本定則 主任 質疑応答
16:30～17:00	キャンパス案内
17:00～17:30	会場移動
17:30～	自主研修

第2日目 2月20日(金)	
時 間	内 容
09:00～10:15	・情報交換(フリーディスカッション)Ⅰ (各大学から業務上の課題等を事前に出してもらい、その課題に対するディスカッションを行い、他大学の取組みを課題解決の参考にする)
10:15～10:30	休 憩
10:30～12:00	・「大学職員の能力開発 ーより良い経営と教職協働のためにー」 講師:広島大学高等教育研究開発センター 山本真一 センター長 質疑応答
12:00～13:00	昼 食
13:00～14:00	・情報交換(フリーディスカッション)Ⅱ
14:00～14:10	閉会挨拶 福岡歯科大学 厚谷彰雄 事務局長

平成20年度SD研修(2/19-20)アンケート集計結果

回収件数：17

1. 全体の日程等(開催時期・日程・時間配分等)について

適切であった	10
概ね適切であった	4
あまり適切でなかった	3
適切ではなかった	0

- ・ GP関係は年度末に収支の処理が多い為、早めの方が良いのでは。
- ・ 2月は各大学で最も業務が多い。
- ・ 時間配分は良かった。開催時期は11～12月頃がよい。
- ・ 開催時期を検討してほしい。
- ・ 開催時期が年度末ということで、業務上苦しかった。
- ・ 講演・ディスカッションのバランスがよく充実していた。
- ・ 開催が業務多忙な時期で、参加者が限られたのが残念だった。

2. 会場について

適切であった	14
概ね適切であった	3
あまり適切でなかった	0
適切ではなかった	0

- ・ 少人数に合わせた部屋の大きさでよかった。
- ・ 最後のフリーディスカッションの部屋は声が響くので、グループ内の話が聞き取りにくかった。
- ・ 大変良い会場をありがとうございました。
- ・ お世話になりました。

3. 研修について

(1)「口腔医学の確立について」 講師：福岡歯科学園 田中健藏 理事長

有意義であった	11
概ね有意義であった	4
あまり有意義でなかった	0
有意義ではなかった	0
無回答	2

- ・ 学問体系の確立に職員として協力していく意義の向上になった。
- ・ 専門的なことが多かったが、職員も認識しておかなければならないと思った。
- ・ 歯学ではなく、口腔医学という考え方について教えていただいた。
- ・ 歯学の方向性の問題点を感じた。
- ・ 口腔医学についてわかりやすい説明だった。
- ・ とても感銘を受けた。

(2)「戦略的大学連携支援事業概要について」 講師:福岡歯科大学 北村憲司 学長

有意義であった	10
概ね有意義であった	5
あまり有意義でなかった	0
有意義ではなかった	0
無回答	2

- ・ 事業ではどのような展開を行っていくのか説明がほしかった。
- ・ 目的を明確にできた。
- ・ 専門的なことが多かったが、職員も認識しておかなければならないと思った。
- ・ 教員と意見交換をするためには、事務職員の能力向上は必要であるという意見に納得した。
- ・ 今回の連携の意見を多くの方が知る機会になりよかったと思う。
- ・ 戦略的大学連携支援事業の概要が理解できた。

(3)基調講演「高等教育及び私学の現状と問題点」 講師:文部科学省高等教育局 村本定則 主任

有意義であった	3
概ね有意義であった	5
あまり有意義でなかった	6
有意義ではなかった	1
無回答	2

- ・ 資料を読んだだけの印象があった。
- ・ 歯科大学の現状における改善策、何故歯科医師過剰になったか、また将来歯科医師の需要が大学としてどれくらい先まで維持できればまた改善されていくのか知りたかった。
- ・ 突然の講師交代で講師自身も難しい講演だったと思うが、資料の説明だけなら配布でもよい。
- ・ 歯学部についてもう少し現状を教えてほしかった。
- ・ 資料を読んでいるだけで実の話がなかった。

(4)「大学事務職員の能力開発-より良い経営と教職協働のために-」

講師:広島大学高等教育研究開発センター 山本真一 センター長

有意義であった	13
概ね有意義であった	3
あまり有意義でなかった	1
有意義ではなかった	0

- ・ 18歳人口の減少による大学経営の悪化に対し、事務職員としての役割の大きさを感じた。
- ・ 事務職員の能力開発の重要性を認識した。
- ・ 教員の先生方にもぜひ聞いていただきたい内容だった。
- ・ もう少し具体的な話を聞きたかった。
- ・ プロフェッショナルに近づくよう努力したい。
- ・ もう少し実務に近い内容の方がよい。研究発表のようであった。
- ・ 教員と事務の役割を再認識できた。自分の仕事に置き換えてもっと努力が必要と感じた。
- ・ 大学というより企業人に近い意識が必要だと痛感した。
- ・ 説明がうまく、よく理解できた。講師の考えている専門職についても、もっと詳しく聞きたいと思った。
- ・ 大学職員として自己啓発の必要性を再認識した。
- ・ これからの大学職員のあるべき姿、やらなければいけないこと、意識など参考になり、勉強になった。
- ・ 職員としてのあるべき姿が再確認できた。学内への周知には時間がかかるが少しずつ良い方向へつなげていきたい。

(5) フリーディスカッションについて

有意義であった	14
概ね有意義であった	3
あまり有意義でなかった	0
有意義ではなかった	0

- ・ 各大学の方と本音の意見交換ができた。大変有意義で貴重な時間を過ごせました。
- ・ 非常に有意義であったので、もう少し時間を増やしてほしい。あと1時間くらい。
- ・ 事前にテーマを決めてディスカッションした方がよい。
- ・ 座談会のようになっていたが、共通の問題点があることが分かった。
- ・ 今回のようにテーマを限定しない方がよい。
- ・ 4名という人数での意見交換は今後の業務の上で非常に参考になるよい場となった。
- ・ 歯科系大学同士のディスカッションをして、同じ環境、同じ悩みをもっていることを実感した。
- ・ 時間がもっと長ければよかったと思う。
- ・ 他大学との情報交換により、業務遂行上の同じ問題点が認識でき、今後も大学に戻り情報交換できる人脈ができた。大変有意義な時間だった。
- ・ 職種が異なっても問題点、悩み等共有することができた。
- ・ 事前に各人の担当業務を聞いてそれを基に班に振り分けた方がよい。
- ・ 各大学でも問題を知ることができ、気づきにつながった。大変参考になる意見ばかりだった。

＜取り上げてほしいテーマ＞

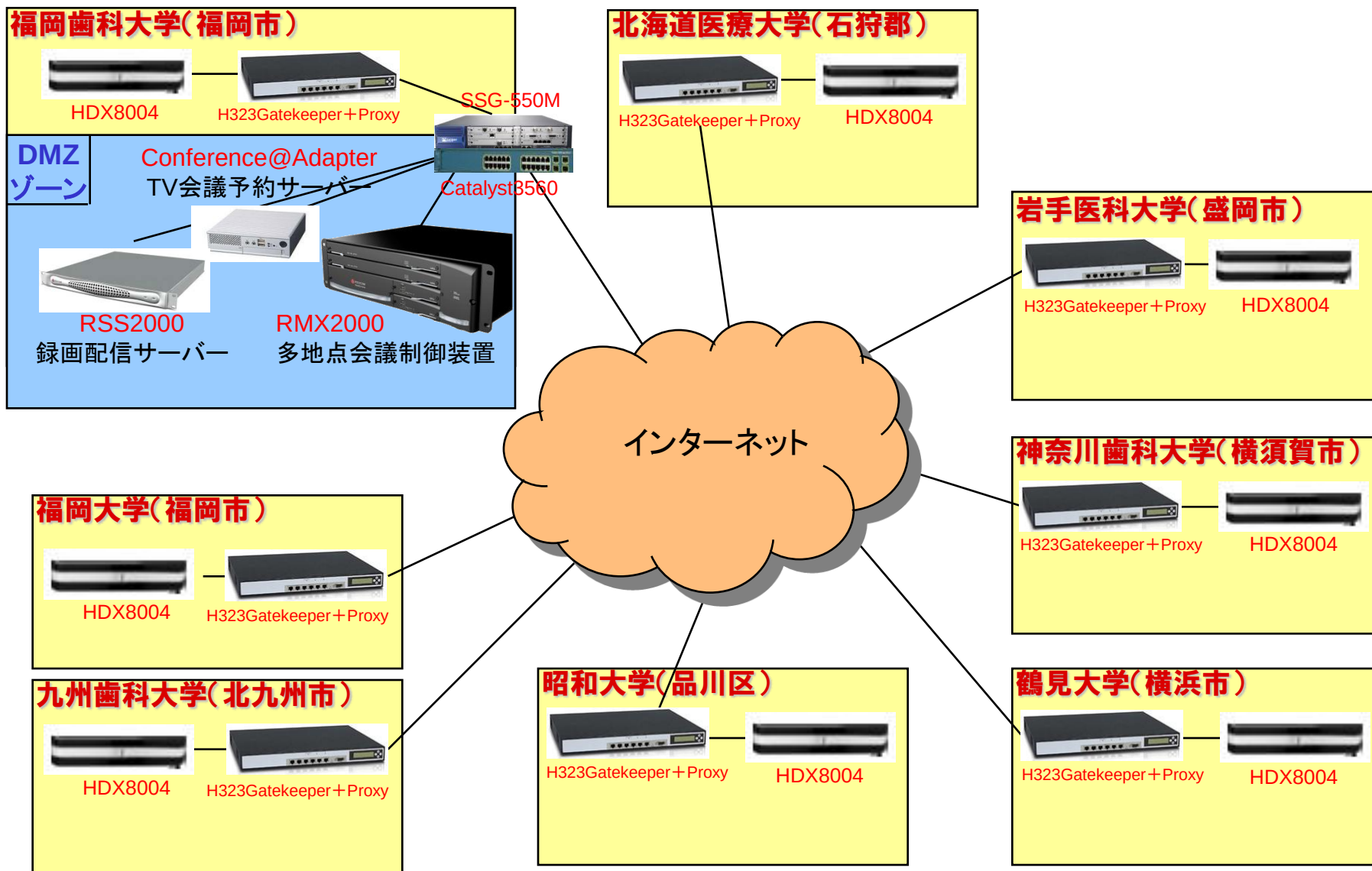
競争的資金獲得に関して

管理経費削減に関して

4. お気づきの点やご意見・要望、今後取り上げてほしい事項

- ・ 他大学の方々と意見交換ができ、非常に有意義な研修だった。今後もできるだけ参加し、色々なことを吸収して業務に生かしたい。
- ・ 2日間にわたりお世話くださった福岡歯科大学様に厚く御礼申し上げます。他大学の方々との意見交換を通じ、今後取り組むべき自分自身の課題も見えてきたように思います。このような場を設けていただき本当にありがとうございました。
- ・ 福岡歯科大学のスタッフの方にお世話になり、ありがとうございました。
- ・ 今回、貴重な機会をありがとうございました。
- ・ お世話になりました。夜の情報交換が非常に有意義でした。主管校の重要さもわかりました。
- ・ フリーディスカッションではやはりある程度テーマを決めている方がよいと思った。現状報告会となり、内容がぼやける。
- ・ 各大学の実情がわかり、今後の糧としていきたい。福歯大様お疲れ様でした。
- ・ 福岡歯科大学の皆さんありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・ 福歯大のスタッフの皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。
- ・ 福岡歯科大学の皆様にご世話になりました。ありがとうございました。おかげ様で有意義な研修となりました。
- ・ とてもよいSD研修でした。ありがとうございました。
- ・ とても有意義な時間だったので、またこのメンバーでディスカッションしたいと思った。
- ・ 日常業務で疑問に思っていること等、ざっくばらんに話げできたので非常に有意義であった。
- ・ 初日の時間外研修、とても有意義でした。準備等、大変ご苦勞があったかと思ひます。ありがとうございました。

全体システム構成

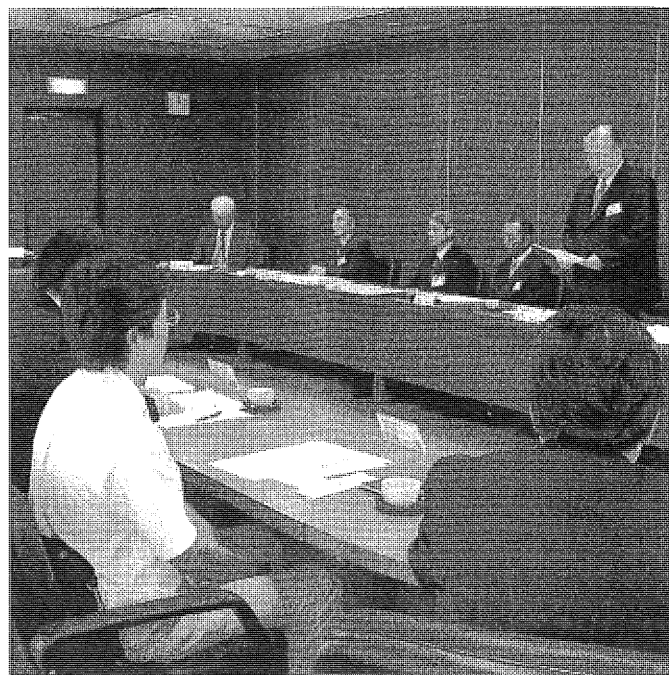


(1) 2008年(平成20年)11月4日(火曜日)

(昭和42年9月22日)
(第三種郵便物認可)

日本歯科新聞

週刊(毎月4回、火曜日発行) 第1579号



第1回連携大学学長・学部長会議では連携事業における今後の方向性が話し合われた

「口腔医学」確立 と教育体制整備

文科省「大学間連携戦略」に採択

歯科・医科系8大学が連携

「口腔医学」の学問体系の確立と、時代にマッチする医学・歯学統一の教育を目指すため、八つの大学が手を結んだ。福岡歯科大学を代表校として、九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学が連携する「口腔医学」の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」が文科省の平成20年度戦略的大学連携支援事業「大学間連携戦略」に採択された。

福岡歯科大が代表

「口腔疾患の予防・治療」「歯学」から、「医学」の学問体系の中に確立した

「口腔医学」により行うのが最善」との考えから、第一段階として、医歯連携による「口腔医学」の学問体系の確立とその教育体制の育成を目指す。実施体制としては、各連携校の学長・学部長、担当代表者、職員による「連携大学学長・学部長会議」や「担当者会議」、「連携事務会議」などを実施。広域連携の地勢的問題をクリアするために高速ネット

ワークシステムのテレビ会議を設けて情報、認識の共通化を図る。評価機構として、選任された教職員及び学外の有識者らによる「口腔医学自己点検・評価委員会」を設置し、各大学にフィードバックしていく。また、国内・国際シンポジウムの開催も検討する。将来的には同連携事業を核として、より大きな連携を形成し、医師・歯科

医師の在り方や、時代にマッチする医学・歯学教育体制を再検討するのが目的。なお、第1回連携大学学長・学部長会議は9月に開かれており、連携事業の推進や実施方法について協議された。第2回会議は、来年の1月10日に昭和大学で開かれる。事務に関する統括は福岡大連携企画室が行う。

第1579号

日本歯科新聞

2008年(平成20年)

11月4日

<発行所>

日本歯科新聞社

〒101-0061

東京都千代田区三崎町2-20-4

電話03(3234)2475

FAX03(3234)2477

http://www.dentalnews.co.jp/

jdn@dentalnews.co.jp

年間購読料18,900円(税・送料込)

郵便口座番号00120-5-130369

厚生労働省記者クラブ加盟社

日刊

Daily Dental News

信通科歯

【無断転載を禁ず】

〈発行所〉日本歯科新聞社 厚生労働省記者クラブ所属

本社：〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-4

☎03(3234)2475代/FAX03(3234)8302/メールアドレス jdn@denalnews.co.jp

きょうは2ページです

歯科・医科系8大学が連携

「口腔医学」確立と教育体制整備

「口腔医学」の学問体系の確立と、時代にマッチする医学・歯学統一の教育を目指すため、八つの大学が手を結んだ。福岡歯科大学を代表校として、九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学が連携する「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」が文科

省の平成20年度戦略的大学連携支援事業「大学間連携戦略」に採択された。

「口腔疾患の予防・治療を行う医療人の育成は『歯学』から、『医学』の学問体系の中に確立した『口腔医学』により行うのが最善」との考えから、第一段階として、歯科連携による「口腔医学」の学問体系の確立とその教育体制の育成を目指す。

実施体制としては、各連携校の学長・学部長、担当代表者、職員による「連携大学学長・学部長会議」や「担当者会議」、「連携事務会議」などを実施。広域連携の地勢的問題をクリアするために高速ネットワークシステム

のテレビ会議を設けて情報・認識の共通化を図る。評価機構として、選任された教職員及び学外の有識

者らによる「口腔医学自己点検・評価委員会」を設置し、各大学にフィードバックしていく。また、国内・国際シンポジウムの開催も検討する。

将来的には同連携事業を核として、より大きな連携を形成し、医師・歯科医師の在り方や、時代にマッチする医学・歯学教育体制を再検討するのが目的。

なお、第1回連携大学学長・学部長会議は9月に開かれており、連携事業の推進や実施方法について協議された。

2025年に国民が必要とする医療・介護費用は07年の41兆円から最大94兆円まで膨らむとの試算を政府は10月23日、社会保障国民会議サービス保障分科会に提示した。

2025年の医療介護費用試算

政府

大連携企画室が行う。

「本ホームページ」
<http://www.dentalnews.co.jp/>



鹿児島県歯が

100周年

鹿児島県歯科医師会の創立100周年、国民健康保険組合設立50周年、協同組合設立15周年の記念式典、講演・祝賀会が2日、鹿児島市の城山観光ホテルで開かれ、県内外の関係者約40

0人が出席した。式典に先立ち、明治40年に6人の会員からスタートし、現在825人となるまでの同会の歩みを綴る映像が放映された。

式辞で四元貢会長は、「多くの困難を乗り越えてきた諸先輩からこれからの未来を委ねていただき、我々は万感の思いをこめて後輩達に渡さねばならぬ大きな責務を負っている」と述べ、会の基本理念にのっとり更な

る邁進を誓った。そして記念事業としてのテレビCMや広報キヤラパン、住民向け講演会などを通じ、歯科保健医療の再認識を図っていくことを紹介した。

また、来賓として伊藤祐一郎県知事、日本歯科医師会の大久保満男会長があいさつした。

表彰状や記念品などが手渡され、受賞者を代表して児玉利徳氏が謝辞を述べた。

式典終了後には自民党参議院議員会長で元厚労相の尾辻秀久氏による記念講演「国家財政と医療・経済財政諮問会議は百害あるのみ」が行われた。

祝賀会では保岡興治衆院議員、石井みどり参院議員、森博幸鹿児島市長が祝辞で更なる発展を願った。

①の場合では医療・介護費は85兆円程度で追加的に必要となる財源は保険料9兆円、公費11兆円で、公費を

(2面に続く)

スクールトピックス

School Topics

★暮らしのなかの守人って？／福岡工業大学

少年野球の監督や消防団員などの取り組みをテーマにした市民公開環境講座「暮らしのなかの守人(もりびと)」が24日(水)、福岡工業大学(福岡市東区)で開かれる。午後2時40分からの1時間半で、入場は無料。同大社会環境学部環境科学研究所の主催で、講師は同学部の山室敦嗣准教授。ボランティア活動など

と呼ばれることが多い消防団員などの活動に対し、山室准教授は「ボランティアと言っては特別なものとして別世界へ押しやってしまう気がする」として、別の視点を紹介。人々が地域活動に気軽に参加できる雰囲気づくりへのヒントを提示する。詳しくは同研究所 ☎092 (606) 3236 へ。

★創立 75 周年で記念講演会／福岡大学

2009年に創立75周年を迎える福岡大学(福岡市城南区)は24日(水)午後3時から、同市中央区のホテルニューオータニ博多で記念講演会「地域の発展と活性化を考える」を開く。

大和竹史副学長による同大の社会貢献の推進に関する講演の後、特別講演として西日本シティ銀行頭取

の久保田勇夫氏が「米欧の『金融危機』と日本経済」をテーマに世界的な金融問題について、次いで九州経済産業局長の橋高公久氏が「九州地域経済の活性化に向けて」と題して話す。

参加は無料。事前申し込みが必要で、先着200人まで。申し込みや問い合わせは、同大記念講演会事務局 ☎092 (415) 2757 へ。

★芸術科高校生の卒業制作展／福岡県立太宰府高校

福岡県立太宰府高校(同県太宰府市)は来年1月20日(火)からの6日間、福岡市中央区の福岡県立美術館で、美術と書道の芸術科の生徒約40人による卒業制作展を開く。

期間中は同美術館の1、3階の展示室を使い、絵画や工芸、彫刻、デザインなど美術専攻生の作品と、臨書や創作、仮名、刻字など書道専攻生の

作品の合計約400点を展示。同校芸術科は「芸術科の生徒にとって卒業制作展は“もう一つの卒業式”のようなもの。卒業制作展に作品を展示するために、毎日遅くまで作品制作に励んできた成果を見てほしい」と、多くの参観を呼び掛けている。入場は無料。詳しくは同校芸術科 ☎092 (921) 4019 へ。

教育情報 Station

教育情報ステーションは、福岡の教育機関で取り組まれている最新の研究・教育と活発なキャンパスを紹介する月刊紙です。
(毎月第3日曜日発行予定)

企画・制作／西日本新聞社広告局

虫歯などの治療にとどまらず、全身の健康とも密接に結び付く口の中のケア、いわゆる口腔(こうくう)ケアへの関心が高まっている。福岡歯科大学(福岡市早良区)を代表とする全国8大学は従来の「歯学」を発展させ、全身の健康を目的とした歯科医療「口腔医学」の学問体系を確立させようと、「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」事業を立ち上げた。医学・歯学を統合した時代にマッチする教育を目指すこの事業は、文部科学省の2008年度戦略的大学連携支援事業「大学間連携戦略」に採択された。事業の内容や意気込みについて、福岡歯科大学の北村憲司教授に聞いた。

口腔医学の確立へ、全国8大学がスクラム
—2008年度文科省支援事業に認定代表校・福岡歯科大学
北村 憲司教授にインタビュー

高齢者のQOL向上

一福岡歯科大学が以前から重視していた口腔医学の確立への動きが本格化しましたね。

北村 今までの歯科治療は虫歯や入れ歯など、“健康な人”の歯の機能回復が目的でした。しかし高齢者にとっての口腔ケアは、体全体の健康と密接に結び付いています。例えば、

食べ物を飲み込む反射機能が低下して、本来気管に入ってはいけな物が気管に入って肺炎を起こしたり、かむ力が弱まって脳に刺激が届きにくくなり、認知機能が低下しやすくなったりします。65歳以上の高齢者が国内人口の約3割を占める現代では、高

齢者が食べたり話したりする機能を保ち、社会参加を通じて生活の質(QOL)を向上させることは、社会の活力の向上につながります。現代の歯科医師には、全身の健康維持について医師と同等の知識と理解を持ち、口腔ケアもできる技量が求められています。人材育成を担う大学としては、「歯学」にとどまらず、医学の学問体系の中に「口腔医学」を確立することが必要と考えたのです。

カリキュラム全体を改革

一文部科学省が支援する3年間で、どのようなことを進めていくのですか。

北村 本学をはじめ、北海道医療大学(北海道当別町)と岩手医科大学(盛岡市)、昭和大学(東京都品川区)、神奈川歯科大学(神奈川県横浜須賀町)、鶴見大学(横浜市)、九州歯科大学(北九州市小倉北区)、福岡大学(福岡市城南区)の8大学が協力し、口腔医学カリキュラムの創設と教育体制の確立に取り組みます。

—どのようにして？

北村 歯学部では、内科や外科、耳鼻科など医科のカリキュラムを充実させ、学部全体の教育改革を行います。実際の業務は歯科医

師法と医師法で明確に分けられていますが、チーム医療を進めるために互いに知識として持っておくべきことをカリキュラムに組み込んでいきます。例えば、歯周病菌が糖尿病の悪化に深く関係していることや、口内手術の抜糸後に心臓弁膜症が起りやすいことなど、それぞれの分野の治療に関連する知識を学べるようにするのです。このため、まずは連携校の学長・学部長会議や担当者会議などを通して、どのカリキュラムを盛り込むかを決め、教職員に対する教育研修や一般の人々に「口腔医学」について理解してもらうための情報発信も行います。このため、国内・国際シンポジウムなども予定しています。

連携校には医学部も

—連携校の中には、歯学部だけでなく医学部が交じっていることも特色ですね。

北村 医学部での口腔医学分野のカリキュラムも非常に大事ですので、医学部の学生さ



▲福岡歯科大学の実習風景。口腔医学の確立をにらんだ教育改革でカリキュラムはどう変わるのか

んに対して本学に隣接する高齢者施設での実習を取り入れていくことで進めていく予定です。九州では本学のほかに、医学部を持つ福岡大学が参加していますから、将来的には互いの授業に出席できるようにすることもあるでしょう。患者さんを中心に医師同士が連携する「チーム医療」のためにも重要なことだと思っています。

—最後に、取り組みへの意気込みを。

北村 口の中と全身の健康に関連付けて考える医療が大切だと分かっている、これまでは漠然とした意識でしかありませんでした。今回8大学が連携して新たな学問体系づくりに着手することで、実現への第一歩が踏み出せました。教育の視点を身体パーツに関する専門家による医療から、患者さんを中心とした専門家による医療へと変え、「何かが起こって対応する」のではなく、「何かが起こらないように対応する」歯科医や医師を育てていきたいと考えています。

地域の健康づくりリーダーを育成

来年4月、ライフ・ウェルネス学科新設

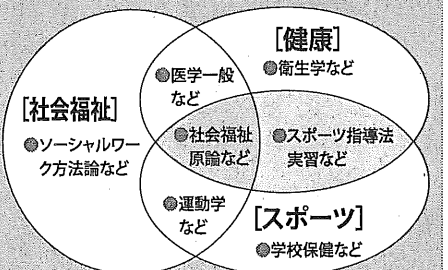
熊本学園大学



キャンパスこぼれ話

Clipping Board

ライフ・ウェルネス学科の仕組み

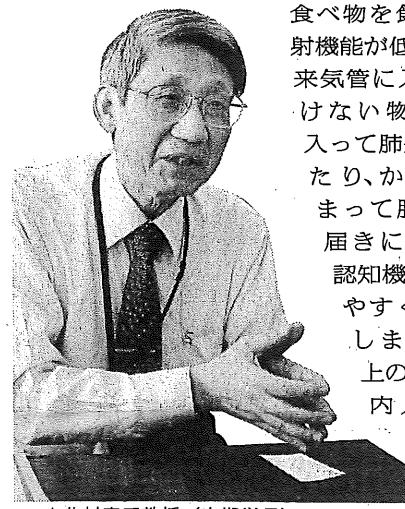


これからの地域社会における健康づくりを担う人材を育てようと、熊本学園大学(熊本市)は2009年4月、社会福祉学部「ライフ・ウェルネス学科」(入学定員80人)を新設する。ウェルネス(Wellness)とは、心身の健康だけでなく人の生・人生観や生きがいを含む幅広い健康観のこと。同学科では、住民一人一人がウェルネスをはぐくみ、健康的で充実した人生を送るようになるための社会福祉の専門家を育て、同学科自体が地域での健康づくりの拠点としての役割を発揮していくことを教育目標としている。

カリキュラムは、社会福祉・健康・スポーツを柱に構成。「スポーツ指導法実習」や「運動処方」「レクリエーション概論」などの保健体育学分野と、「ソーシャルワーク方法論」や「地域福祉論」などの社会福祉学分野の両方を学べる教育体制を整え、両者が融合した新たな教育体系の創造を目指す＝図参照。

同学科で学べば、社会福祉士国家試験受験資格や中学校教諭一種免許(保健体育)、高校教諭一種免許(同)などの取得が可能となる予定で、卒業後は福祉専門職従事者だけでなく広く地域の健康づくり活動やスポーツ指導者、教職員、スポーツクラブなどでの健康運動指導士などの道があるという。

同大広報室では「地域社会における健康寿命の延伸に向けたユニークな新しい取り組み。たくさんの学生に学びに来てほしい」と呼び掛けている。



▲北村憲司教授(次期学長)

教育學術新聞

東京都千代田区九段北
4-2-25 私学会館内
編集兼発行人小出秀文
TEL 03(3261)7048
FAX 03(3261)0769
1部100円(税込)毎週水曜発行
年4800円(税込)第5水曜休刊
(2009◎)

www.shidaikyo.or.jp

戦略的大学連携支援事業 「口腔医学」の確立に向け 医科歯科系8大学が連携



挨拶する田中健蔵福岡歯科大学理事長

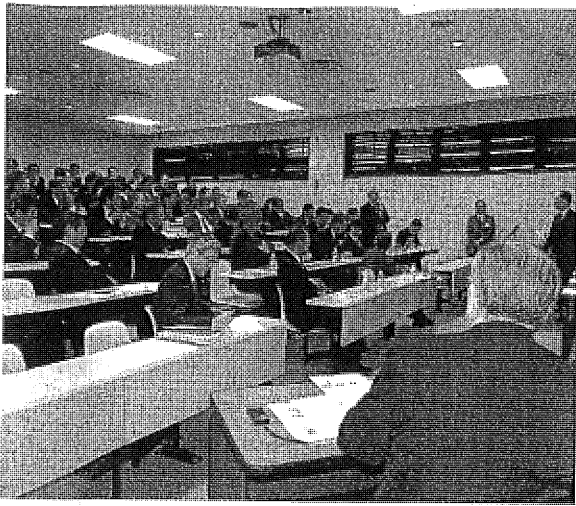
歯科医療における疾病構造の変化と高齢社会の到来によって、これまでの歯とその周囲組織の疾患を治療する歯科医から、全身の健康に留意し、歯・歯周組織・口腔の疾患の予防・治療・ケアのできる口腔医になることが歯科医師に求められている。

このような社会ニーズに対応するため、福岡歯科大学は医学部及び歯学部を持つ福岡大学、九州歯科大学、昭和大学、鶴見大学、神奈川歯科大学、岩手医科大学及び北海道医療大学の全国七大学と連携し、このたび「口腔医学の確立と医学・歯学教育体制の再考」をテーマに文科省の助成を得て戦略的大学連携支援事業を開始した。

同事業は、歯とその周囲組織に集中し、技術教育を重視した現在の歯科

医学教育を再考し、生命科学と充実した一般医科教育を基盤とした口腔医学教育によって歯科医師の養成を図ろうとするもの。併せて、歯科医師養成教育が医師養成教育と独立して行われていることによって生じている医学教育における口腔疾患教育の欠落をなくし、全身の健康に留意できる歯科医師と口腔ケアに対する意識の高い医師の連携によって、これからの社会で必要とされる患者さん中心の医療を共同して実践できる体制を作ることが目標としている。

そのため、同事業では口腔医学教育を実践するモデルカリキュラムを提案し、連携校がそれぞれの特徴を生かして次世代が求める歯科医師と医師の教育改革を目指している。



「口腔医学」展望を議論

全国から関係者ら100人が参加

福岡歯科大学を中心に、8大学が連携し、「口腔医学」の学問体系確立等を旨とする事業の関連シンポジウムが1月22日、福岡県歯科医師会で開かれた。写真。同事業は、文部科学省助成の戦略的大学連携支援事業で、福岡歯科大学と九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学が連携する「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」。

8大学連携事業でシンポジウム

シンポジウムでは、「口腔医学」歯科医療の将来像をテーマに、福岡歯科大学理事長の田中健藏氏がエフェレータを務めた。同大学長の本田武司氏、鶴見大学歯学部

特命教授の瀬戸院一氏、北海道大学歯学部教授の戸塚靖則氏、国立医療センター名誉総長の鴨下重彦氏、福岡大学医学部教授の中川尚志氏が講演。講演後の討論では、活発な議論が交わされた。全国から約100人の歯学・医学関係者が参加

し、関係者は「口腔医学のウムになった」と話す。推進に有意義なシンポジウムになったと話す。

第1591号

日本歯科新聞

2009年(平成21年)

2月10日

<発行所>

日本歯科新聞社

〒101-0061

東京都千代田区三崎町2-20-4

電話03(3234)2475

FAX03(3234)2477

<http://www.dentalnews.co.jp/>

jdn@dentalnews.co.jp

年間購読料18,900円(税・送料込)

郵便口座番号00120-5-130369

厚生労働省記者クラブ加盟社

日刊

Daily Dental News

【無断転載を禁ず】

きょうは3ページです

信通科歯

〈発行所〉日本歯科新聞社 厚生労働省記者クラブ所属

本社：〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-4

☎03(3234)2475代/FAX03(3234)8302/メールアドレス jdn@dentalnews.co.jp

TV会議システムで8大学結ぶ

連携事業で
SD研修 変わる職員の役割

大学改革が求められる中、職員の役割にも変化が必要とされている。連携大学間で職員自身が在るべき姿を考えるためのSD(スタッフ・ディベロップメント)研修が19、20の両日、福岡歯科大学で開かれ、TV会議システムにより九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学に同時配信された。

文科省の20年度戦略的大学連携支援事業に採択された、8大学による「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」の一環として行われたもの。

広島大学高等教育開発センターの山本眞一センター長は「大学事務職員の能力開発によりよい大学経営のために」と題して講演。新たな大学マネジメントの必要性として、「教授会中心の大学管理運営から、学長・学部

長のリーダーシップによる大学経営に移行し、その経営・営業のサポートに、職員の力が期待されている」と強調。大学の経営・管理・運営への参画や、教育・研究活動の企画と支援、教員との協働により、教員と目標を共有するなどを役割として示した。

同事業では、口腔医学を確立するために、8大学間で議論、情報交換などを重ね、それぞれに合った大学の在り方を目指していく構え。来年度はTV会議システムを応用して学生に対する講義なども検討していく。

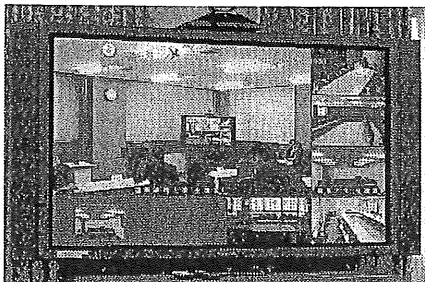
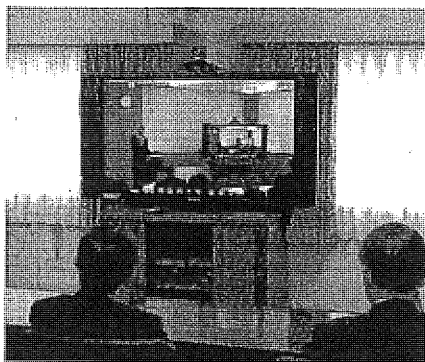
文科省の20年度戦略的大学連携支援事業に採択された、8大学による「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」の一環として行われたもの。

広島大学高等教育開発センターの山本眞一センター長は「大学事務職員の能力開発によりよい大学経営のために」と題して講演。新たな大学マネジメントの必要性として、「教授会中心の大学管理運営から、学長・学部

変わる職員の役割

連携事業でSD研修

大学改革が求められる中、職員の役割にも変化が必要とされている。連携大学間で職員自身が在るべき姿を考えるためのSD(スタッフ・ディベロップメント)研修が19、20の両日、福岡歯科大学で開かれ、TV会議システムにより九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡



TV会議システムで各大学の職員、関係者らが傍聴した。①鶴見大学で研修の講演を聞く職員ら②連携大学それぞれの画面も表示できる

力が期待されて

SD(スタッフ・ディベロップメント)研修が19、20の両日、福岡歯科大学で開かれ、TV会議システムにより九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡

SD(スタッフ・ディベロップメント)研修が19、20の両日、福岡歯科大学で開かれ、TV会議システムにより九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡

TV会議システムで8大学結ぶ

大学に同時配信された。文科省の20年度戦略的太

学連携支援事業に採択された、8大学による「口腔

医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」の一環として行われ

センターの山本真一セン

いる」と強調。大学の経営・管理・運営への参画や、教育・研究活動の企画と支援、教員との協働により、教員と目標を共有するなどを役割として示した。

同事業では、口腔医学を確立するために、8大学間で議論、情報交換などを重ね、それぞれに合った大学の在り方を目指していく構え。来年度はTV会議システムを応用して学生に対する講義なども検討している。

日本歯科新聞

2009年(平成21年)

2月24日

<発行所>

日本歯科新聞社

〒101-0061

東京都千代田区三崎町2-20-4

電話03(3234)2475

FAX03(3234)2477

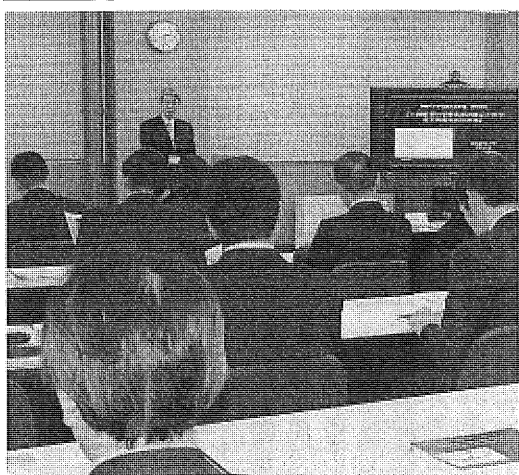
<http://www.dentalnews.co.jp/>

jdn@dentalnews.co.jp

年間購読料18,900円(税・送料込)

郵便口座番号00120-5-130369

厚生労働省記者クラブ加盟社



研修会の様子

医歯系大学の連携

福岡歯科大でSD研修会

去る二月十九日と二十日の両日、福岡歯科大学(北村憲司学長)においてSD(スタッフ・ティベロップメント)研修会が開催された。同研修会は、文科省の戦

略的大学連携支援事業に採択された、同大が代表校となり、九州歯科大、北海道医療大、岩手医科大、昭和医大、神奈川歯科大、鶴見大、福岡大と連携して取組む「口腔医学」の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考の事業の一環として、各連携校の中核的な職員に対し、問題解決能力向上を目指すことを目的に開催された。

一日目は、福岡歯科学園田中健蔵理事長の「口腔医学の確立について」、北村学長の「戦略的大学連携支援事業概要について」の講演の後、文科省高等教育局私学部の村本定則運営調査係主任による基調講演「高

昭和28年創刊



教育學術新聞
東京都千代田区九段北
4-2-25 私学会館内
編集兼発行人小出秀文
TEL 03(3261)7048
FAX 03(3261)0769
1部100円(税込)毎週水曜発行
年4800円(税込)第5水曜休刊
(2009◎)
www.shidaikyo.or.jp

等教育及び私学の現状と問題点」が行われた。

二日目は、事前に提出された業務上の課題について、グループ討議、意見の交換を行った。続いて広島大学高等教育研究開発センターの山本眞一センター長が「大学職員の能力開発ーより良い経営と教職協働のためにー」と題する講演を行った後、同講演に関する感想及び各大学の能力開発の実態等について活発なディスカッションが行われた。

研修会を通し、参加者は、大学を取り巻く環境の変化や大学から求められている能力・知識を再確認した。また、これからの大学職員としてなすべきことを考える機会となり、北海道から九州までの医学・歯学系大学職員が交流する、またとない機会となった。
なお、同研修会は、TV会議システムを利用して講演を連携校に同時配信し、好評を得た。

平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業
口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考

～歯科医学から口腔医学へ～

口の中から、 人の健康が見えてきた。

これからの歯科医療は変わります。

これまではっきりしていなかった歯周病と糖尿病や心臓の病気などとの関係がだんだん分かってきました。その結果、虫歯の治療だけにとどまらない、いわゆる口腔（こうくう）ケアへの意識の高まりが本格化してきています。健康な身体を維持するためには口の健康、口の中のトータルケアから始めることが大切です。このような社会状況に対応するため、このたび「歯学」を発展させ、歯の健康だけではなく全身の健康を担う歯科医療、「口腔医学」によって歯科医師を養成する事業を開始しました。医学・歯学の学問体系を整備し、時代に合った教育を目指すこの「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」事業は、文部科学省2008年度戦略的大学連携支援事業に採択され、本格的な活動を開始しました。

全国の8大学が連携して 事業に取り組んでいます。

本事業は福岡歯科大学を代表校として、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、九州歯科大学、福岡大学の8校が協力。歯学部では医科のカリキュラムを充実させるなど、授業全体



の改革をはかります。一方で医学部を持つ大学では、口腔ケアを重視した実習を取り入れるなど、これからの社会が必要とする医療人を育成するための教育を検討していきます。

事業の本格化へ向けて、 具体的な取り組みをはじめています。

今後も、口腔医学によるこれからの歯科医療、医学・歯学教育体制の再考について多くの皆さんに知っていただくためのさまざまな取り組みを計画しています。

〈平成20年度活動実績〉

- ・大学教育改革プログラム合同フォーラム参加
- ・「口腔医学」シンポジウム開催
- ・海外調査
- ・海外の歯科医師養成教育の紹介
- ・SD（スタッフ・ディベロップメント）研修
- ・連携大学間テレビ会議

ご意見をお寄せ下さい

福岡歯科大学 kikaku@college.fdcnet.ac.jp

文部科学省戦略的大学連携支援事業(平成20年度～22年度)

口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考

全身の健康を考える歯科医療へ！

変わりつつある歯科医療に対応

歯周病と糖尿病や心臓の病気との因果関係が数多くの研究で明らかになってきました。だからこそ、歯の治療だけにとどまらない歯科医療が今必要とされています。健康志向が高まる中、健康な身体は、口の健康、口の中のケアから始めるのが、重要なポイント。

そこで、時代のニーズに対応するため歯学を発展させ、歯の健康だけでなく全身の健康を担う歯科医療、「口腔医学」に基づく歯科医師を養成する事業を8大学(福岡歯科大学、九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学)が連携協力して開始しました。医学・歯学の学問体系を整備し、時代に合った教育を目指すこの「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」事業は文部科学省助成の2008年度戦略的大学連携支援事業にも採択され、質の高い医療人の養成を行います。



「歯科医学」から「口腔医学」へ

最善の医療を提供し、信頼される医療人の育成

口腔医学とは、全身疾患・全身の健康との関連を重視した口腔疾患の予防・治療・ケアを対象とする学問です。

これからの社会が必要とする歯科医師は全身の健康維持について医師と同等な知識と理解を持ち、口腔疾患の予防・治療に対する専門的な能力を持った医療者です。こうした医療者を育成するために、連携する8大学は協力して「口腔医学カリキュラムの作成と実施」、「教職員の相互研修派遣」、「教職員に対する教育研修」、「海外の教育事情に関する情報収集とその応用」、「口腔医学に関する情報の発信」などの事業を行い、医師・歯科医師の資質向上に役立てます。

口腔医学教育を実施することによって、口腔の健康から全身の健康を担う医療人、21世紀社会に求められる医療人を育成します。

歯科医学教育

歯と周囲組織に特化した教育

歯と周囲組織の疾病の治療

口腔医学教育

全身との関連を重視した教育

口腔と歯・周囲組織の疾病の治療



TV会議システムで、各大学の教職員が相方向の議論、情報交換をリアルタイムで行えます。

〈平成20年度活動実績〉

大学教育改革プログラム合同フォーラム参加

「口腔医学」シンポジウム開催

海外調査

海外の歯科医師養成教育の紹介

SD(スタッフ・ディベロップメント)研修

連携大学間テレビ会議

ご意見をお寄せ下さい

福岡歯科大学 企画課

TEL.092-801-0411
kikaku@college.fdcnet.ac.jp

平成20年度文部科学省

戦略的大学連携支援事業

代表校

福岡歯科大学

連携校

九州歯科大学

北海道医療大学

岩手医科大学

昭和大学

神奈川歯科大学

鶴見大学

福岡大学

関係自治体等

社会福祉法人「学而会」

特別養護老人ホーム

サンシャインプラザ

更新履歴

概要(PDF)

概要図

トピックス

- 「海外視察報告会」を開催(3月23日)
- 「第1回口腔医学自己点検・評価委員会」を開催(3月23日)
- 平成20年度SD研修を開催(2月19日～20日)
- 『口腔医学』シンポジウム、開催(平成20年度FD事業)(1月22日)
- 「第2回口腔医学カリキュラム作成担当者会議」を開催(1月22日)
- 文科省平成20年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッションへ出展しました。(平成21年1月12～13日、於:パシフィコ横浜)
- 「第2回学長・学部長会議」及び「第2回戦略連携事業実施担当者会議」合同会議を開催しました。(1月10日、於:昭和大学旗の台キャンパス)
- 第1回各担当者会議、開催
- 『「口腔医学」確立と教育体制整備』として日本歯科新聞に掲載されました。(11月4日付) 日本歯科新聞(PDF) 歯科通信(PDF)
- 第1回連携大学学長・学部長会議を開催しました。(9月4日)

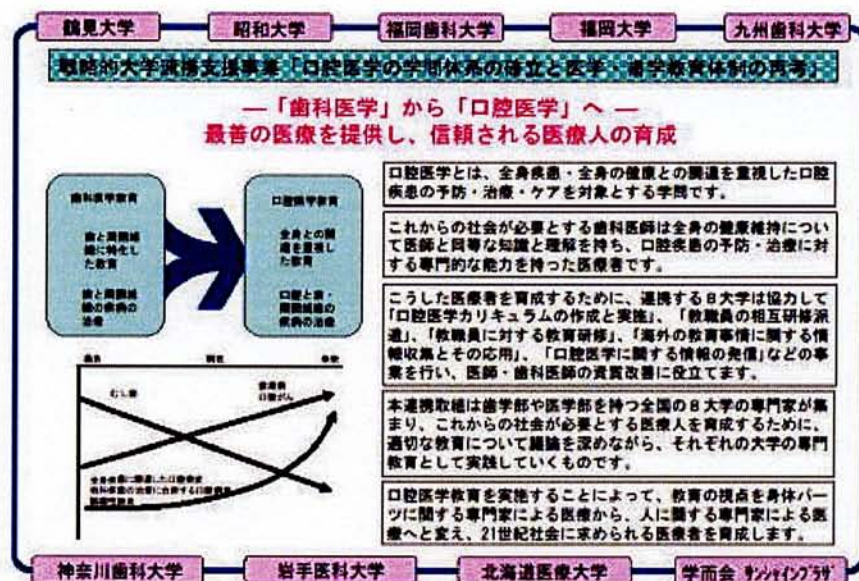
お知らせ

・取組名称「口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考」

本事業は、次代の患者ニーズ・社会ニーズに対応する医療人の育成を目指すもので、医歯学連携による口腔医学の教育プログラム開発・実施、FD・SD活動、教職員の人事交流、学外実習など多様な連携取組が行われます。また、全国横断的に医歯学系の大学間が連携することで効果的な教育研究活動の展開が期待され、特に歯科医師の資質向上に大きく貢献することになると思われます。

1. 事業の戦略目標

医学、歯学、生命科学等の急速な進歩、少子高齢化社会、国民の生活環境の改善等によって疾病構造は変化し、医療に対する社会のニーズは大きく変化した。時代のニーズに対応した医療人の育成が医療機関に求められており、口腔疾患の予防・治療を行う医療人の育成には「歯学」から、「医学」の学問体系の中に確立した「口腔医学」によって行うのが最善である。また、高齢者医療における口腔疾患の予防・治療および口腔ケアの重要性は大きくなっており、医学教育における「口腔医学」の重要性も認識する必要がある。本事業は「口腔医学」を創設し、医学・歯学の教育体制を再考し、次代の患者ニーズ・社会ニーズに対応する医療人の育成を目指す。その第一段階として、医歯連携によって「口腔医学」の学問体系を確立し、その教育体制を育成する。本連携取組を核として、より大きな連携形成につとめ、現在の医師・歯科医師育成のあり方、医学部・歯学部を設置形態等について検討し、連携校は協力して法制度等を含めた教育環境の改革を関係官庁および関連諸団体に働きかけ、合理的でかつ効果的な教育環境の整備を図り、次代にマッチする医学・歯学を統合した一体教育を実施する。



2. 密接な連携を担保するための実施体制の在り方

各連携校の学長・学部長、担当代表者、職員による「連携大学学長・学部長会議」、「担当者会議」および「連携事務会議」によって取組を実施し、必要に応じて各大学の審議機関で審議する。担当者会議は高速ネットワークシステムを用いたテレビ会議と通常の会議とによって情報と認識の共通化を行う。事務に関する統括は福岡歯科大学連携企画室が行い、教育プログラムの実施に関する具体的な業務は各連携大学事務部局が担当する。各大学から選任された教職員及び学外の有識者が構成される「口腔医学自己点検・評価委員会」を設置し、本取組の内部評価を行い、評価結果は各連携校の各施設・部局にフィードバックし改善資料とする。

3. その他大学間連携を実施する上で必要な事項

広域連携という本取組の地勢的問題をクリアするため、テレビ会議システムを連携校間に配備する。国内・国際シンポジウムを開催するとともに、歯科医師会、医師会等関係諸団体と協議し、プログラムの深化と社会に対する啓発を行う。口腔医学確立に向けて、協力施設の地域・広域ネットワーク化、連携校専任教職員の人事交流の活性化等を図る。

4. 戦略的大学連携支援事業とは

文部科学省では、平成20年度から、国公私立大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化、大学運営基盤の強化等を図ることを目的とした「戦略的大学連携支援事業」を実施している。

お問い合わせ

〒814-0193

福岡市早良区田村2丁目15番1号

福岡歯科学園企画課

TEL: 092-801-0411(代) FAX: 092-801-3678

MAIL: kikaku@college.fdcnet.ac.jp

[Home](#)[加盟大学ニュース](#)[▶ 加盟大学ニュース](#)[高等教育ニュース](#)[審議会ニュース](#)[協会本部ニュース](#)[協会支部ニュース](#)[研修会・協議会参加
申し込み](#)[イベント掲載申請](#)[アンケート調査](#)

2009年1月22日

福岡歯科大学

「口腔医学」シンポジウム開催

去る1月22日、福岡県歯科医師会館において、文部科学省助成の8大学(福岡歯科大学・九州歯科大学・北海道医療大学・岩手医科大学・昭和大学・神奈川歯科大学・鶴見大学・福岡大学)連携による戦略的大学連携支援事業取組名称「口腔医学の学問体系的確立と医学・歯学教育体制の再考」に係る平成20年度FD事業:『口腔医学』シンポジウムが開催された。



テーマを『「口腔医学」—歯科医療の将来像—』として、福岡歯科大学の田中健蔵理事長をモデレータ、に本田武司福岡歯科大学長、瀬戸暁一鶴見大学歯学部特命教授、戸塚靖則北海道大学歯学部教授、鴨下重彦国立国際医療センター名誉総長、中川尚志福岡大学医学部教授らが講演した。そののちに討論が行われ、活発な議論が交わされました。100人に及ぶ歯学・医学の関係者が全国から参加し、口腔医学の推進に有意義なシンポジウムとなった。

[Page Top](#)

[Home](#)[加盟大学ニュース](#)[ニュース 一覧へ](#)

2009年2月19日

**戦略的大学連携支援事業SD研修を開催
福岡歯科大学**

去る2月19日、20日の2日間、福岡歯科大学において、戦略的大学連携支援事業平成20年度SD(スタッフ・ディベロップメント)研修が開催された。

これは、文部科学省の戦略的大学連携支援事業に採択された、福岡歯科大学が代表校となり、九州歯科大学、北海道医療大学、岩手医科大学、昭和大学、神奈川歯科大学、鶴見大学、福岡大学と連携して取組む『「口腔医学」の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考』の事業の一環として行われた。

同研修は、各連携校の中核的な職員に対し、問題解決能力向上を目指すことを目的に開催された。

1日目は、福岡歯科学園田中健蔵理事長の「口腔医学の確立について」、福岡歯科大学北村憲司学長の「戦略的大学連携支援事業概要について」の講演の後、文科省高等教育局村本定則氏による基調講演「高等教育及び私学の現状と問題点」が行われた。

2日目は、事前に提出された業務上の課題について、グループ討議を行い、意見の交換を行いました。続いて広島大学高等教育研究開発センター山本眞一センター長の「大学職員の能力開発—より良い経営と教職協働のために—」と題する講演が行われ、その後に感想及び各大学の能力開発の実態等についての活発なディスカッションが行われた。参加者は、大学を取り巻く環境の変化や大学から求められている能力・知識を再確認し、これからの大学職員として、為すべきことを考える機会であったとともに、北海道から九州までの医学・歯学系大学職員が交流する、またとない機会となった。

今回は、連携校の職員に、それぞれの大学で講演を聴講することができるよう、補助金で導入したTV会議システムを利用の上、講演を連携校に同時配信した。

[▶ 加盟大学ニュース](#)[高等教育ニュース](#)[審議会ニュース](#)[協会本部ニュース](#)[協会支部ニュース](#)[研修会・協議会参加
申し込み](#)[イベント掲載申請](#)[アンケート調査](#)[Page Top](#)

平成 20 年度戦略的大学連携支援事業

口腔医学の学問体系の確立と医学・歯学教育体制の再考

コンセプト

「歯科医学」から「口腔医学」へ

口腔疾患は全身の健康に密接に関係しており、歯とその周囲組織の疾患の予防・治療に局限した「歯科医学」教育から全身疾患との関係を含めた口腔疾患の予防・治療・ケアを対象とする「口腔医学」に再編し、「口腔医学」教育によって歯科医師を育成することが、社会のニーズであり、時代の要請である。

本事業は社会ニーズから乖離しつつある歯科医学教育を次世代にマッチした口腔医学教育として再編し、口腔疾患と全身疾患との関連について十分な知識を持ち、口腔ケアを含む口腔疾患の予防、治療ができる医療人の育成を目指す。

背景

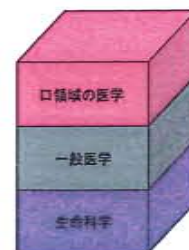
- 1 医療の進歩、栄養状態の改善、健康に対する意識の向上等による平均寿命の延長
- 2 栄養状態の変化と生活習慣病の増加
- 3 少子化と団塊世代の高齢化による少子高齢社会の到来
- 4 むし歯の減少と残存歯の増加による歯周病の増加
- 5 高齢化に伴う口腔がんの増加
- 6 口腔疾患と全身疾患の関係の科学的な証明

歯科医師は口腔ケアの観点から全身の健康に留意できる医療者であることが必要であり、医師は全身の健康を管理する観点から口腔ケアの重要性を認識する必要がある。一般医学に関する教育を受けた歯科医師と口腔疾患に関する教育を受けた医師による連携がこれからの医療にとって最善の方法である。そのために、大学は「医学」教育と、医学と共通基盤にたつ「口腔医学」教育によって、医師及び歯科医師を育成し、国民の健康に奉仕することが求められている。

現在の歯科医師育成教育

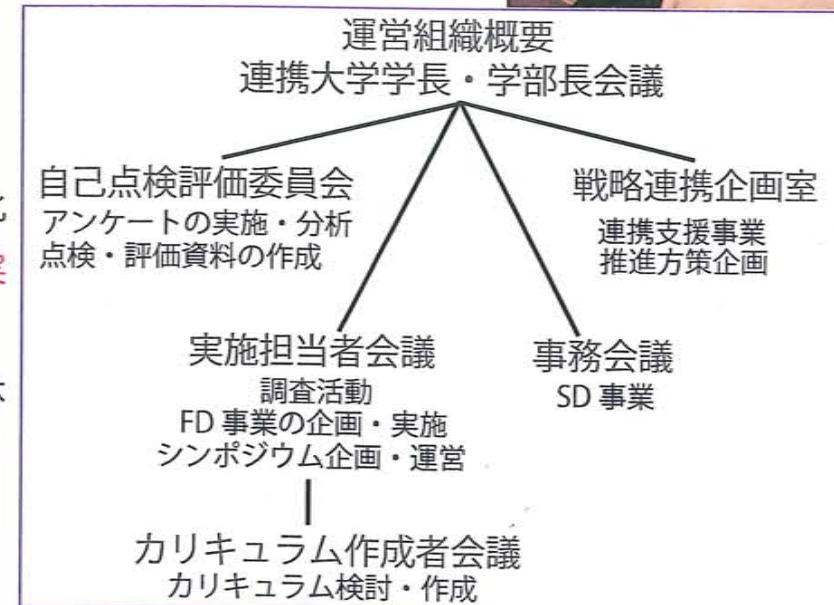


これからの歯科医師育成教育



事業内容：口腔医学を確立するために

- 1 歯学部における一般医学教育の意義・役割と充実に向けた事業
一般医学教育カリキュラムの作成と授業の実施
- 2 医学部における口腔医学教育の意義・役割と充実に向けた事業
口腔ケアを重視した介護実習の実施
- 3 教職員の人事交流の活性化・FD/SD 事業の共同実施による能力向上
授業担当者の相互乗り入れ
職員の派遣研修
- 4 基礎専門教育と社会医学系教育の役割分析と口腔医学教育への最適化
基礎系・社会医学系教育の共同実施の可能性追求
- 5 社会への情報発信と医学・歯学一体的教育に向けての環境整備
シンポジウム・講演会の開催、
ポスター等の作成・配布、
学識経験者、医療教育研究者、医療従事者との意見交換等



「口腔医学」シンポジウム

口腔医学

-歯科医療の将来像-



平成21年1月22日(木)

14:00～17:00

福岡県歯科医師会館(5階)

視聴覚室

スピーカー:

- | | |
|-------|---------------------|
| 本田 武司 | (福岡歯科大学学長) |
| 瀬戸 暎一 | (鶴見大学歯学部特命教授) |
| 戸塚 靖則 | (北海道大学歯学部教授) |
| 鴨下 重彦 | (財団法人小児医学研究振興財団理事長) |
| 中川 尚志 | (福岡大学医学部教授) |

モデレータ:

- | | |
|-------|-------------|
| 田中 健藏 | (福岡歯科学園理事長) |
|-------|-------------|

多数の方の御来聴を歓迎します。シンポジウム終了後、シンポジストを交えて懇親会(1階)を開催します。

連絡先: 福岡歯科大学企画課戦略連携企画室

Tel: 092-801-0411 E-mail: kikaku@college.fdcnet.ac.jp